

始



389
57

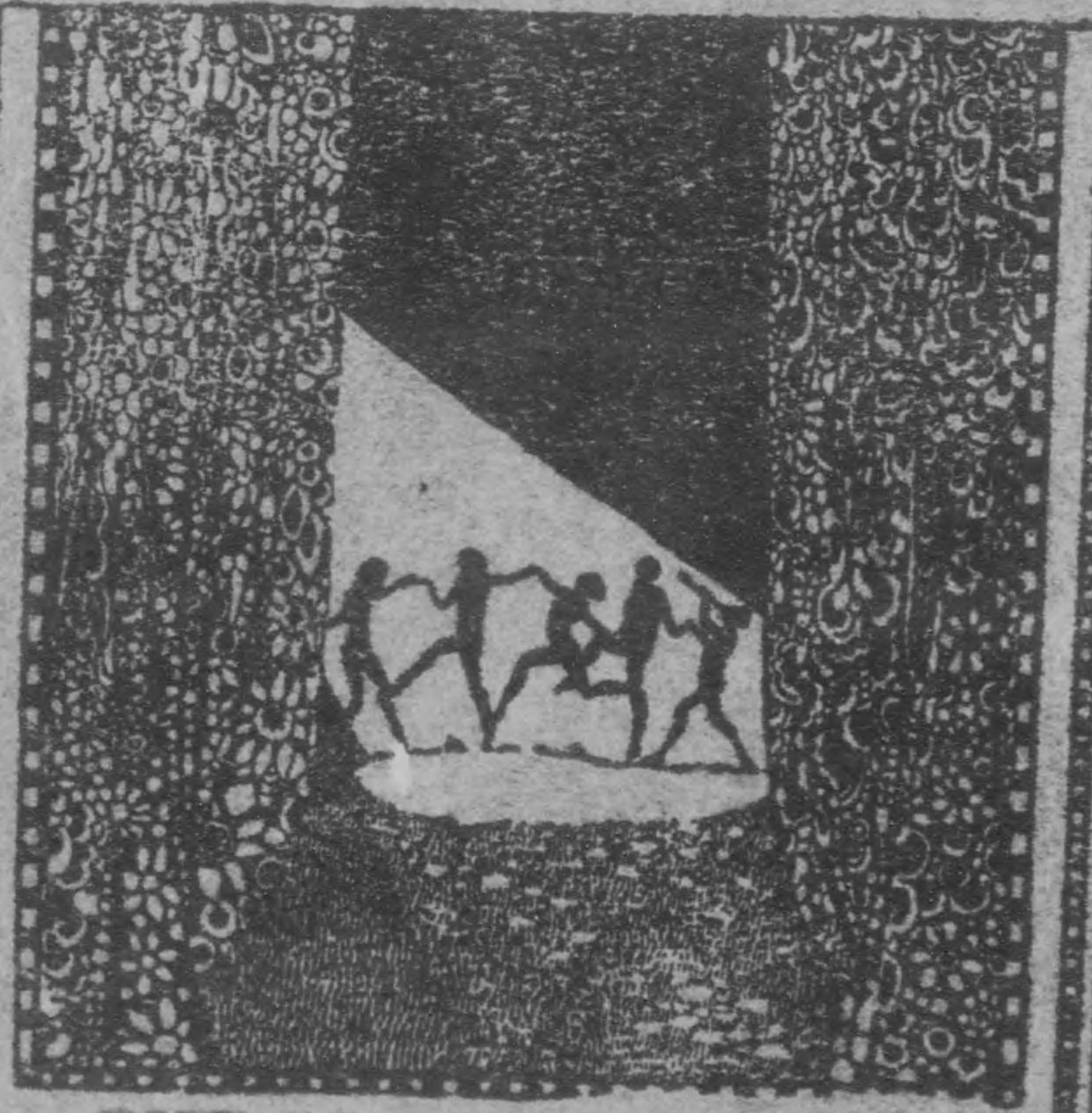


389

57

見捨てられて

英國 アルフレッド・スウトロ作



ONE-ACT PLAY SERIES

VOL. I. No. II

389-57

One-Act Play Series

英國 アルフレッド・スウトロ作

日本室

淳譯

見捨てられて

【禁無断上演轉載】

大正
10 9 10
内交

VOL. I. No. II.

アルフレッド・スウトロ (Alfred Sutro) は一八六三年八月七日倫敦に生れて、倫敦と白耳義のブラッセルとで學校教育を享けた。彼は最初メテルリンクの翻譯者として識られてゐたが、一九〇〇年「幻の洞」^{エトナ}に筆を執つたのが彼の戯曲作家の生活に入る肇めであつた。それから引續き「白痴の娘」「セリコオの壁」「立派な良人」筆十數種の戯曲を發表してゐる。

「見捨てられて」は原名を「The Man on the Kerb.」といつて彼の「脚本五種」の中に入つてゐる。一九〇八年三月倫敦のアルド井ツク座で上演せられた。彼は「軽いユウモアの中に諷刺と暗示とを含ませた作風」を以て現英國劇壇に喧傳せられてゐるが、その作物に就いては毀譽褒貶が甚しい。「きいた風な見かけ倒しの作品である」と極端に排する人もある。要するに artificial comedian といふのが一般の定評である。

人。

ジョオセフ・マツシユウ。

メリイ。(その妻)

時。

現代

處。

ウエスト・エンドの住家。



景

ある地下室。毀れた椅子が二三脚と、石の床の上に敷いたぼろ／＼の蒲團マトレスと、古いトランクの外には、家具といつてはなにもない。荷造りしたまゝの箱の上に、僅かのみ捨てられて

見捨てられて

食器と鍋と湯沸とが載せてある。火の消えた塗込爐の傍の床の上には紙包がとり散かされてある。壁は濕氣で澤山の汚染のあとが一面に滲み出て、穢く汚れてある。背後の戸口の傍の窓からは地面が見えてある。窓硝子が二ヶ處壞れてゐて、新聞紙を填めてある。

子供が古いぼろ／＼の外套にくるまつて、蒲團の上に寝てゐる。メリイがその上に身を跨めて、低い聲で唄を謳つてゐる。メリイはまだうら若くて、非常に美しくはあ
るが、しかしその頬は窪んで、眼の周りにはひどい隈が出来てゐる。その容貌は大層蒼褪めて血の氣がない。著物はいたく破れてむさくるしいが、しかし巧みに哀傷を起させるやうに見せてゐる。部屋の中の燈さいつたら、たゞ上の歩道の街燈が差し込むだけである。

ジョオが地下室に通ふ階段を下りて這入つて来る。彼の著物は街角などでよく見か

ける、無恰好な縞目も解らないありふれたものである。彼の貌立が尋常と違つた輪廓であるといふのではないが、全く快活に見える青年らしく、そしてきりりつと引緊つて、風雨に曝されたものである。長い間無理に歩いて脚を麻痺れさせた人のやうに、彼はひどく疲れ切つて、足を引摺つて這入る。戸口の處に立つて彼は犬のやうに身顛をして、雨雫を拂ひ落とす。メリイは先づ、子供が寝てゐるかどうかを確かめてから、待ち遠しさうに立ち上つて彼を迎へる。彼女は男の落膽した様子を見てとると、その面を俯せる。

メリイ。(思に惱んで) 何もなかつて、ジョオ?

ジョオ。なかつた。一錢も、なかつた。

(メリイは顔をそむけて涙を抑へる)

見捨てられて

見捨てられて

シヨオ。まるつきりなかつた。昨日とおんなじだ——昨日よか酷い
——二つ三つの銅貨も持つて歸られなかつたんだからな。時にお
前はどうかだつた？

メリイ。よその奥さんがミンニイに食物を下さいましたの——

シヨオ。(裏心から)そりやまあ、よかつたね！

メリイ。あの兒をね、バストライクツク麥菓子屋に連れてつて下さいましたのよ、ジ

ヨオ——

シヨオ。では坊やは腹一杯食べたんだね？ よかつたな！ それでお
前は？

メリイ。ミンニイがね、私にと思つてそれは大きな甘麵麩をそつと

隠してくれましたのよ。

シヨオ。奥さんはお前になんにも呉れなかつたのかい？

メリイ。お小言だけでしたわ、シヨオ。こんな酷いひん日に子供を外に連
れてくるつてね。

シヨオ。(椅子に腰をかけたが、苦笑して)は、は！ いつだつて、あいつら
はこんな風に叱るのだ。さうぢやないかね？「おいこら、乞食を
するんぢやない！ 街で乞食に物を遣つてはいけない！」とね。

——おれはいつだつたか、あいつらの一人に云つてやつたさ。ご
らん下さい。私の手に觸つてみて下さい。私の胸を叩いてみて下
さい。ね、私は餓じいのです。それに家にはみんなが餓じがつて

見捨てられて

見捨てられて

ゐるのです。——それを「街で乞食に物を遣つてはいけない」と
ね。

メリイ。(男の腕に手を掛けて) おや、ジヨオ。貴方は濡れてゐますのね!

ジヨオ。三時間程前から、ひどく降つてるんだ——ざあざあと。お
前、寒いんだよ。少しでも火を燃すことは出来ないかね。メリ
イ?

メリイ。なんで、ジヨオ?

ジヨオ。(周囲を見廻してすぐ立ち上り、壁の傍にあるよろく椅子を取つて、その脚を
折りながら) これでよ! 月賦拂ひで素晴らしい結構な道具をお前
に買つてやるよ——廣告の見本のやうなしつかりした、實質的の

ものをね。(彼は喋りながら、この脆い物を折る)で、考へてみるのに、お
れ達が人間である以上は、こんなつまらないものにも代價を拂は
ねばならんだ——價格の三倍も拂はねばならんだ! それに
また、あのつまらん奴、恰度おれ達みたいにつまらん奴のことを
考へてみるのに、そいつらは生血を流してそれを拵へるんだ。——
——で生血を吸つてる奴等は、それを賣つて自分の軀を肥してるん
だ。——要するにそいつを、もとの奴に戻してやるんだ。さうす
りやおれたちは一寸の間でも暖まれるといふんだ。(塗込爐の中に薪
を抱へ込む) 何か新聞はないか、メリイ?

メリイ。(トランクの中から古新聞紙をとり出して) はい、ジヨオ。

見捨てられて

見捨てられて

ジヨオ。それなら火を燃すたしになるだらう。(彼はそれに目を遣り、それから注意して、薪の下に敷く。メリイは卓から洋燈をとつてくる) 何々日報とかなんとかいふのは——おれ達が如何に幸福な國民であるか——如何に太陽の没することなき帝國が光榮であるかを報道してゐる。だがおれは潰し馬鈴薯ポテトと臘腸ソーセイジの代りなら、今晚でもジブラルタルを賣りとばすよ。またもし、一週間に一磅くれる書記の爲事を世話してくれるものがあつたら、露西亞が印度を奪つたつて關はないさ。——そんなことは、御隨意さ！ 燐寸をとつてくれ、メリイ？

メリイ。(ジヨオの前に立ちながら、手渡す) ねえ、あなた。氣をつけてね——

——たつた二本しか残つてないんですから！

ジヨオ。氣をつけるよ。待てよ、だが——おれのパイプにはまだ煙草がちつとでも残つてたかしら。(ポケットからパイプを掴み出して) おれに注意をして、歩道カーブから立ち退かした巡査が煙草を呉れたんだ。「物乞をしてはいかん」といつてね。それから「パイプを持つとるか？ さうか、ちや煙草をやらう」つてね。その男はきつとおれに錢を呉れたかも知れないよ。だつて、それがね。おれがその日一番最初はなに聞いた深切な言葉だつたんだからね。おれは胸が一杯だつたよ。——さうだ。底の方に些つとばかり残つてるな。(煙を動かして) さあ、先づ火をつけてと。(燐寸を摺つて新聞紙に火をつける——

見捨てられて

見捨てられて

と燃えつく) それから、このパイプを。(火は燃え上る。彼は元氣づいて火の前に寄る) ポオ、、、シエウツツか…………おれの肺の中までも水が流れ込んであるやうに、おれは濡れてるんだなあ——おれの脚は、おれのぢやないやうな氣がする——それに頭だつて、鼻だつて! (欠伸をする) ううん、煙草はいゝね、——お蔭で暖くなつたよ——もつと傍へお寄り、メリイ。もう夜中過ぎだね——ぢや、おれが家を出たのは、この結構な、贅澤な家を出たのは、夜が明けるとすぐ間がなかつたんだね。それからおれは終日街を歩き廻つたんだ。とどのつまり、巡查が煙草をパイプに一杯詰めてくれたんだ。おれは溝に泛いて流れてた麵麩の片を拾つて、晝

飯にしたんだ。——それから晩飯はカフェエ・ロオヤルの料理場の匂を嗅いで済したんだ。これで一日経つたんだな。

メリイ。(男の手を摩つて) お氣の毒ね、お氣の毒ね!

ジヨオ。芝居が閉場する頃におれは、レイセスタア・スクエアに一時間許り立つてゐたよ。馬車を呼ぶとか、または何かして銅貨の一つでも儲けようと思つてね。そこを幸福さうに、また綺麗で暖かさうにして、皆んな流れをして出て来たよ——箱馬車や自動車だね——サヴォイやカアルトンで晚餐をやるのさ——だけどおれ達みてやうなものは、百人も二百人も貧民窟でお腹を空してゐるんだ——それをたいおれ達は見てゐるだけなんだからなあ。あいつ

見捨てられて

見捨てられて

らは、晚餐を食べに行つちまつたよ——續々と出て行つてね。それでおれはびしょ濡れになつたのさ——それでもそこに立つてたんだ。巡査を避けたり、馬の首を避けたり、自動車に身を躲したりしてね——だつて、そんなことは始終だからね——退け、浮浪人退け——退け——退け——

メリイ。私達は何もさうされるやうなことは、してやしないのにね、
ジヨオ——

ジヨオ。(急に激して) さうされる！ おれが今迄にどんな悪いことをしたつていふんだ！ あの商館が破産したのは、おれの責在ぢやなかつたんだ。おまけにおれは他の事業まで駄目だつたんだ。おれ

の人格は立派なものだ——おれは世間に對して恥づる所のない人間だぞ——だがそれが何の役に立つんだ？ おれは働きたい——世間の奴等がおれにさせないんだ！

メリイ。あの私の病氣で、みんな貯金は遣つて了つたのね。ああ、ジヨオ、死んぢまつた方が私、よかつたわ！

ジヨオ。ぢや、おれを一人残しといてか？ そりやお前、不人情だよ、メリイ。キリスさんの方はどうだつた？ 間代のことをやかましく云はなかつたかい？

メリイ。ええ、そりや欲しかつたんでせうよ。勿論——あの人だつてそりや、ひどく困つてるんですものね——でも、あの人はずう

見捨てられて

見捨てられて

云ひましたよ、私達を追ひ立てはしないつて。それからね、私明日、二階のあの人の娘さんのところに行つて來ますの——その方は隣寸の箱を貼つてるのよ——でも私にはどうしてやるのか解らないんですもの——日に一志シルリングも儲とれてよ。

ジヨオ。一日に一志シルリングだつて！ 素敵だね！（パイプの火が消えか、つてゐる。彼は最後の服を喫つて、その中を透しみて、煙草がみんな無くなつてゐるのを確める。聽といて太息と共にそれを下に置く）おれも、そいつをやつてみようかなあ。今朝また、おれは教會へ行つたんだ。掃除人夫に使つてくれるかどうかと思つてね。——ところが、おれよりも先に三十人からもあつたんだからね。おれは薪まきを割らうとしたんだが、駄目

だつた——三度も割ると咳が出ちやつて——どこか内臓みうちに悪い處があるんだせ。この世の中のありとあらゆることをやつてみやうとしたんだ——さうするさね。おれよりも前に他の奴がゐて、それで缺員あきがないんだ。だからおれは頼むわけにゆかなかつたんだ。だつてね、紳士がね、強請せがむわけにゆかないぢやないかね。一日に一志シルリングか——そんなに澤山、誰に儲けられる！ え、メリイ、一週間に十四志シルリングになるんだらう——収入が！ おれたちやらうよ！

メリイ。一志シルリングまるではないのよ、ジヨオ——自分で糊だとか何だとかいつたものを用意しなければならぬんですもの。それにお

見捨てられて

見捨てられて

錢かじになる前にね、貴方、二三週間もそれを習はねばならないんで
すわ、無論ね。

ジヨオ。(落膽がつかちして)さうかね? では、その二三週間、どうしておれた
ちは生活やってゆけるだらうね? ぞつかでそのうち、いゝことがあ
ればいゝんだがな。(立ち上つて伸をする)ところで、茲に三ヶ國の語
學で通信文を巧みにすることが出来、また複式記載の簿記に十二
年も経験のある、自由公民権を有する英國人があるんだがね——
しかしその男には、飢より外には何も與へられないんだからな
あ。(また伸をする)

さはいへ、外國よそくに民となるべき、

いかなる誘惑まどはしあるとも——

(急に激情まどはしにかられて) 神様! ズウル人の方がましです!
メリイ。(男の方に少し寄つて) あなた——

ジヨオ。(振り返りながら) え?

メリイ。ジヨオ。ジヨオ。私達は大変苦勞をしなければなりませんの
ね。さうですわね?

ジヨオ。しなければならぬ! おれを拒絶ことばつたこの世の中に、なん
で爲事があるものか? おれを鼻の先であしられておきながら、
ほかに何かあるもんか? おれに見向もこないのに、なんで好都合
なんてことがあるものか?

見捨てられて

見捨てられて

メリイ。(遠慮と彼の傍にそつと寄り添つて、夫の腕に手をかけながら) あなた——
ジョオ。(顔を上げて女の方に向く) ええ——どうした？ (女は眼を俯せて怯し
たやうにイんでゐる) ええ？ 言つてごらんよ、メリイ！
メリイ。(突然に) これが、ジョオ。

(女は熱に浮かされたやうに蒲團の傍に進んで行つて、下から大きなふくらんだ墓口を
取り出して男にそれを手渡しする)

ジョオ。(眼を圓くして) 墓口だね！

メリイ。(頷いて) ええ。

ジョオ。おまへは——

メリイ。拾つたのよ。

ジョオ。(女を噴めながら) 拾つた？

メリイ。(どきまぎして) 道で拾つたの——さうよ。

ジョオ。どうして？

メリイ。雨が降り出したのよ、ジョオ——で、私地下鐵道の停車場に
入つて——それから本賣檯のところに立つて、ミンニイに繪入新聞
を見せてゐたのよ——するとね、年寄つた女の人一枚買ったの
——それで墓口を出して——この墓口なのよ——お代を拂つてか
ら——これを檯の上に置いてその人が裾をたくし上げやうとぐ
すぐずしてたの——その時にね、誰かその人に話しかけたのよ。
——お友達らしかつたわ——それからね——そこいらに大勢人が
見捨てられて

見捨てられて

立つてたのよ——どうしたんだか私には、解らなかつたんですが

——ミンニイと一緒に私、通りへ出ちやつたの——

ジヨオ。この墓口を持つてかい？

メリイ。ええ——

ジヨオ。誰も跟いて来やしなかつた？

メリイ。誰も来なかつたわ。ミンニイヲ連れてゐたんで、私走れなかつたのよ。

ジヨオ。なんだつてお前はさういふことをしたんだい？

メリイ。私にも解りませんわ——何か私の身の内にあるものがさせだ
んですわね——その人が私のつい手の傍へ墓口を置いたんですも

の——私の指は、いつの間にかそれを握つてたんです——すると
もう私、通りへ出てゐましたわ。

ジヨオ。その中には幾ら入つてるんだい？

メリイ。まだ見ないのよ、ジヨオ。

ジヨオ。(吃驚して) 見ないんだつて？

メリイ。ええ。私、見る気がしなかつたんですもの。

ジヨオ。(愁然として) こんなことに成らうとは思はなかつたよ、メリ
イ。

メリイ。(一生懸命になつて) 私達は何かしなければなりませんわ。燐寸箱
を拵へて幾らかお錢を儲けるまでに、何週間もそれを習ふのにか
見捨てられて

見捨てられて

ゝるんでせう。それにもう一月も、貴方はあたりまへの御飯を召上つたことはないぢやありませんか——私だつてさうよ。この墓口の中にお錢が入つてゐれば、貴方の著物だつて買へるぢやありませんか——それに私のちね、また——私、著物がいらいますわ！あの方の年寄りの方は、これを失くしたつて何んでもありませんわ、——あの方は大したお金持です——あの方の外套は本當の黒黄鼯の毛皮でしたわ——それに誰も私達をみつけないかつたんですもの——お錢を見分けることは出来ないぢやありませんか。重いんですよ、ジヨオ——どつさり中に入つてゐるらしいわ。

ジヨオ。(無意識に手に載せて重さを量る)なるほど——重いね——

メリイ。(待ち遠しさうに)開けてみてよ、ジヨオ。

ジヨオ。(また女の方に振り返つて)何故自分でしないのだ？

メリイ。私はつい今迄かう待つてるやうな気が——何か思ひがけないいゝことがありさうな気がしてゐたんですの。それはね、貴方が誰かに誠心をもつて通りで呼び止められるやうな気がね——でその人と一緒に今晚入らつしやるのではないかと——それからお目にかゝつて——ミンニイもね——「では、お金を——僕がまた君達の生活の道を立て、上げやう」——と仰有るのよ——さうなれば、このお金入れはお返し出来てよ、ジヨオ。

ジヨオ。(また無意識に手でその重みをみながら)さうだなあ。

見捨てられて

見捨てられて

メリイ。このまゝでは仕方がありませんわね？ 貴方また夜通し咳くんぢやないの、昨日のやうに——でも藥屋でくれたつまらない藥もありませんわ、著物が、出来れば貴方、何か爲事があるかもしれませんがね——貴方がそんな見つともない風来だから、骨を折つても駄目なんですわね。

ジョオ。人が嗤ふともさ。

メリイ。(自分の姿をちらとみて) これで通りを歩くと私、本當にきまりが悪いわ——

ジョオ。さうだね——そいつが使へるんだとね。おまけに坊やがあるんだ。あの兒に氣をつけてやらなくつちや。

メリイ。目を覺さないやうに氣をつけて下さいな、ジョオ！

ジョオ。むづかつてゐるね。

メリイ。お腹が空いてるのよ。

ジョオ。何か食べたといつたぢやないか？

メリイ。三時だつたんですもの。だつて小さい兒は私達とは違つてよ——正規あたりにまへに御飯がいるんですわ。毎晩々々あの兒はお腹なかを空すかしてゐるんです。でもなんにも遣るもんがないんぢやないの。それで私、お金入れを盗とるやうになつちやつたんです。

ジョオ。(なほ無意識に墓口を握つてゐて、凝乎と噴めてゐる) さうか。では全く

理由わけはなかつたんだな？

見捨てられて

見捨てられて

メリイ。あの可哀さうな子供に、何か暖かい著物がやれますわ。何か
旨い食物も——

シヨオ。(溜息をついて) 泥棒の娘か。

(両手で顔を掩ふて了ふ)

メリイ。あなた!

シヨオ。よくないぢやないか?

無論、扶かりつこはないさ。で、

誰が世話するものかね? 三月といふものはこんな工合でやつて
来たんだ——おれ達は零落^{みすぼら}しい、浅間しい、饑しい限りを盡した
んだ。——友達なんざあ一人だつてありやしない——世間の奴は
みんなさう云つてらあ。「人道^{みち}を避^よける」つてね。一つ、墓口の中

を見やうぢやないか。

メリイ。(待ち遠しさうに) ええ、ええ!

シヨオ。(將に墓口を明けやうとして顔を上げて) 巡査が通つてるんだ。

メリイ。(もどかしげに) でも構はないわ——

シヨオ。(また墓口をひつくり返して) 巡査の足音^{あしをと}を聴いて、可恐^{おっか}なかつたの
は生れて肇めてだ。

(その時彼は、で墓口を掘んだまゝ、一寸の間ためらふ——それから突差の衝動に
かられて、戸口に突進して扉を開けて外に出る。それから地下室の階段を上つてゆ
く)

メリイ。(絶望してやうに叫ぶ) あなた!

見捨てられて

見捨てられて

(彼女は蒲團の上に身を投げかけて、子供の眼の醒さないやうに忍び泣く。シヨオが歸つて来る。首を首垂れて、足を曳すりながら)

メリイ。(まだ歎息してゐるがしかし、氣をきり直して)なんであんなことをなさ
いしましたの？

シヨオ。(屈托して)おれにも解らない――

メリイ。貴方、巡査にお渡しなすつたのね？

シヨオ。ううん。

メリイ。なんて仰有つたのですか？

シヨオ。お前が拾つたつたのだと。

メリイ。どこで？

シヨオ。地下鐵道の停車場で。おれ達は窮迫してゐたから、それを拾
つたのだ。おれ達はそれを開けなかつたんだといつた。それか
ら、この地下室におれ達は住んでゐるんだとも。

メリイ。(聲を少し頭はせて)巡査は自分に藏つとくでせうよ！

シヨオ。(惘然として)さうかも知れない。

(暫くの間沈黙。女は泣へのを歌める。遽かに腕をついて立ち上つて、劇しく)

メリイ。貴方は莫迦です！ 莫迦ですとも！

シヨオ。(歎願するやうに)メリイ！

メリイ。貴方は莫迦正直ね！ 人達が貴方にでも、私にでも、何をし
てくれましたかか？

見捨てられて

見捨てられて

ジヨオ。(また頭を垂れながら) 坊やのためだよ、ね——泥棒の娘なんて

メリイ。みじめな乞食の娘よか、ましぢやありませんか？

ジヨオ。(溜息をついて) さうだがね、つい——

メリイ。貴方は、あの兒が饑^{かつ}ゑてもいゝんですか？

ジヨオ。(絶望して) 何故つて、おれにもそれが解らなかつたんだ？——

あすこを歩いた巡査の聲音を聞いたもんだから——

メリイ。貴方可^{おつ}恐なかつたんですか？

ジヨオ。お前を監獄にやりたくなかつたからね。

メリイ。(咽び泣く) 私もうぢき、乞食の棺に入れられて、お墓へやられ

ちまひますわ！

ジヨオ。(突然飛び上つて) さうなるかも知れんぞ？

メリイ。(眼を圓くして) 貧民院ですつて？

ジヨオ。つまり、いゝぢやないか？ 遅かれ早かれさうなつちまうん

だから。

メリイ。私達を別々にしますわ。

ジヨオ。せめて、お前と坊やだけは、御飯にありつけるよ。

メリイ。私達を別々にしますわ、だつて私、貴方を愛してるのよ。

ジヨオ。あゝ氣の毒な、氣の毒なジヨオ！ 私貴方を愛していますのよ。

見捨てられて

見捨てられて

(夫の方に寄り添ってその手を執る)

シヨオ。(女の手を握つて、身をのしかけながら) 墓口を返したのを勘忍してく
れる?

メリイ。(夫の肩に頭を俯せて) 勘忍しますわ! 貴方の方が正しかったの
よ。飢えと寒さが私を氣違ひにしたんですわ。貴方の方が正し
かつたのよ!

シヨオ。(急に熱情的になつて、飛び上る。メリイは後に跟附めく) おれは正しくな
かつたんだ——卑怯だつたんだ。罪人ずいじんなんだ。恥づべき、不正な
莫迦者なんだ。

メリイ。(喫驚して) あなた!

シヨオ。おれは金を持つてたんだ——この手に金を持つてたんだ——
おれのこの滅茶苦茶な心を籠めて愛してる女の、そのお前があん
なにひどく欲しがつてた金をね。——その金ではおれの娘のお腹
に、食物たべものを入れてやることが出来たのになあ——その金はおれの
だつた、おれのものだつたのだ——でもおれはそいつを返しちま
つたんだ。この腐つた正直せいじの故だ! なんでおれに正直にする權
利があるものか? 世間の奴等はおれを狗のやうにしやがる——
おれが人間だつたといふ記憶のために、どんな義務を負はねばな
らないんだ?

メリイ。(夫にすがりながら、その腕をとつて) 靜にして下さいね、あなた——

見捨てられて

見捨てられて

ミンニイが起きますから。

ジョオ。(振り返りながら眼ばかり光らして、彼女を凝視して) 著物が出来るだら

う——爲事もね。多分——おれ達はこの地下室から出られるかも知れない。明日は外に行つて買物をしやう——商店みせに行つてね

——食物たべものや石炭などが手に入るかも知れないね——

メリイ。もう澤山よ、ジョオ——それが何んになるんですの？ 私達に恵をお垂れなさるのは——たい神様の思召にあるんですわ。貴方巡査に私達のゐる處を仰有つたんですか？

ジョオ。何くそ！ おれは夜通し肺の中から咳を出しちまつて、それから明日起きよう——そうして街に行つて、あつちこつち、あつ

ちこつちと、ぶらつき廻るんだ。あすこの角、ここの角と街に立つてね。人の貌付を眺めたり、暖かで氣樂さうな人達が、商店や事務所に通ふのに眼をつけたりしやう。——で斯うやつてるうちには終局かたがつくだらうからな。

メリイ。(夫にくつ付いて立ちながら、殆ど囁くやうに) 今ぢやいけなくつて、あなた？

ジョオ。(吃驚して女をちらつと見て) 終局かたを？

メリイ。この世では私達を容れてくれないんですもの——

ジョオ。あの金さへあつたらなあ——

メリイ。それはもう仕方がありませんわ。でもあなたがさうしなかつ

見捨てられて

見捨てられて

たので、悦しいわ——ええ、私——私悦しいわ。私達は潔白の身で神様の前が通れますわね——ですから私達は神様に盗みをいたしませんでしたと、申上げられてよ。でも神様は私達に何をしろともお望みなさらなかつたんですわね。それから人達が私達を生かしておいてくれなかつたから、死にましたと神様に申上げませうよ。

ジヨオ。(身慄ひして) いけない。そいつはいけない——止さうよ、メリイ。そんなことは云はないことにしやうね。

メリイ。(思ひ憫んで) あなたにもさうお考へになりました？

ジヨオ。さう考へる！ いけない、メリイ、いけない！ 本當に悪い

こつた。夜だから、寝て明日のことを考へよう。何か思ひがけないいゝことがあるよ——きつとね。

メリイ。何がですか？ お友達つたら、この世界中に一人もないぢやありませんか。

ジヨオ。誰か識つてるものに遭ふだらうよ。

メリイ。その人達にはこれまで遭つたことがあるでせう——しよつち始終断られる人達に。

ジヨオ。(熱情的に) おれは何も悪いことをしはしない——酒も飲まないし博奕も打たないしさ——おれがたゞの書記に過ぎないのは仕方がないぢやないか。それに労働することが出来ないのも！ おれ

見捨てられて

見捨てられて

の肺が弱いのも仕方がないんだ！ 他の人のやうに、おれにもや子がある——で、たゞおれ達の願ひといつたら生かしておいてくれといふだけなんだ！

メリイ。(歎願するやうに) 諦めませうよ、ジョオ。一緒に死にませう。貴方は咳もしないで眠やすまれますわ。死にさへしたらいいのよ。さうしたら神様は人間よか親切にして下さいますわ。

ジョオ。(唸くやうに) いけない、メリイ——いけない！

メリイ。ジョオ。私もうとても辛抱が出来ません——とても出来ません。私だけぢやありませんわ——ミンニイだつて——貴方だつて。もう私、我慢がしきれません！ 朝、ミンニイが欲しがつ

て、朝御飯を強請せびんで泣かれるのにはもう、怖へられませんもの。ジョオ、ね、ジョオ、朝がないやうにして下さい。

ジョオ。(全くなわれ失つて) あゝ、メリイ、メリイ！

メリイ。これは貴方のせいぢやありませんわ。ね——貴方は出来るだけのことをしたんですもの。あなたのせいぢやないの、世間の人貴方に爲事をさせなかつたんですわ。——貴方は本當に辛い目にお會ひになりましたのね。ですもの貴方が私にして下さつたやうな善い御享主を持つた人は、今迄に誰もありませんわ。私は貴方を愛してます、ね、ジョオ。ですからどうかさうして下さい——どうか死んで下さい。それからミンニイも一緒に連れてつて

見捨てられて

見捨てられて

下さいな。

ジョオ。(飛び上つて) メリイ。明日何か盗んで来やう。

メリイ。さうしたら、貴方は監獄へ行きます。その上神様のお怒りを享けます。今なら神様の前へ出ても、私達は耻ぢることなしに通れますわ。さあ、ね、ジョオ——あゝ、さうしませうよ！ 私もう泳へきれませんわ！

ジョオ。いけない。

メリイ。(愁然として) お厭なんですか？

ジョオ。(強情に) うん。貧民院へ行かう。

メリイ。あすこの人達を御覧になつて、さうぢやないの？

ジョオ。うん。

メリイ。窓んここに立つてる人達を御覧になつて、世の中を睨んでる人達を？ あすここでは貴方と私とを引離しますわ。

ジョオ。まだその方がましだよ——

メリイ。(断乎として) それは厭です。ジョオ。私はあなたに對して忠實な妻なのです——また善良母親なのです。それに私は貴方を愛してゐます。假令私が襤褸を身に纏ひ、著物をみんな質に入れて了つてもです。ですからね、私は貧民院に行く位なら、いつそ首を縊つて貴方に別離わかかれしつちまひます。

ジョオ。(聲高に叫ぶ) いかん！ 何かおれに呉れるやうにさせる。で假見捨てられて

見てられて

令おれが死んでも、妻や子供は殺さない！ 明日おれはお金と食物ものを持つて歸つて来る——明日ね——

(突然子供の泣聲がする。シヨオは立ち俯つてその方を凝乎と噴める。メリイは急いで蒲團の處に寄つて、小さい娘を賺す)

メリイ。黙つて、ねえ、黙つて——まだね、朝にはならないんだから、御飯の時刻ときではないのよ。また寝んねなさいよ、ね。ええ、父ちちさんがお歸りになつて、今ちやもう、何もかもいゝ鹽梅になつてるんですからね——いゝえ、お前のお腹なかは空すいちやゐませんよ。本當に——あの綺麗なお菜子を覺えてるでせう。寝んねなさいよ、ミンニイ、ねえ。寒いのか？ (自分のぼろ／＼の肩掛を外して、干渉

を裏んでやる) さあ、ね、これで寒くないでせう。寝んねなさいよ、

ミンニイ—— (メリイが子供の背中を撫で、寝かすので、子供の泣聲は次第に歇む)

シヨオ。(前の方に踵踏めきながら突然聲を上げて) 神様、おゝ神様、麴麴を恵んで下さい！

静かに幕。

見捨てられて

大正十年九月二日印刷
大正十年九月五日發行

(非賣品)

一幕物叢書第一輯第二編 見捨てられて

翻譯者 室 浮

發行所 東京府豊多摩郡澁谷町上澁谷一三五 伊 藤 松 雄

印刷者 東京市麹町區麹町二丁目九番地 小 橋 信 三

印刷所 東京市麹町區麹町二丁目九番地 小 橋 印 刷 所

不許複製

發行所 東京府豊多摩郡澁谷町上澁谷一三五 一幕物叢書刊行會

電話 芝 四 二 七 一 番
振替 東京 五 五 六 五 七 番

389
57



伊藤松雄
室田島淳
譯編

「事物叢書」第一卷第二編

終

